

# ゴルフ文化産業論

## 1 鍋とフライパン革命の意味

リーマンショック後のアイスランドで、当時の政界財界の「経済セレブ」たちが経済自由主義で始めた失策は、最後まで自己責任で終わらせるべし、という市民の正論が貫かれたことを、前回、堤未果氏の著作に基づいて報告した。彼らは、大きすぎて銀行はつぶせない、という俗論を見事に葬ったのだ。

市民たちの闘いは賢明だった。彼らは、武器ではなく生活に密着した鍋とフライパンを両手に持って、国会議事堂を取り囲むデモンストレーションを続けたのだ。そしたらなんと、その後アイスランドは、2012年までに他国への借金を返済し、ユーロ圏で目を見張る成長ぶりだそう。

昨年10年ぶりに訪問したアイスランドも、経済回復力がすごかった。ダブリンの家賃はマンハッタン並みらしい。

アイスランドもアイスランドも、英語が通じる国ではあるが、同じリーマンショックを受けた日本と全く違う展開が、これら島国には起こっている。

欧州西端の2つの島では、非暴力に近い形で、近時の世界的常識を打ち破る「新しい流れ」が生まれつつある。

アイスランドでは、血なまぐさいテロを非暴力の運動が食い止める奇跡が、ジョン・ヒュームにより実現している。

アイスランドでは、当時のグローバルな、すなわちアメリカ的経



出典:アイスランド大使館

済常識を、立ち上がった市民たちが、素手で打ち破ったのだ。アメリカ的常識とは、銀行が失敗したら国民から集めた税金で助けて、ツケは全て普通の国民に回してしまおうというものだ。

長年、殺し合い抗争を繰り返してきた欧州の人たちの知恵と、経済至上主義の象徴というべきアメリカに対するプライドの為せる業なのかもしれない。

ヨーロッパとアジアの両大陸ユ

インしているようなものだ。

## 3 そんな状況の僕たちに出来ることは何だろうか？

まずは、政府・官僚・御用学者・大企業の発信する情報は疑ってみる。彼らがマスコミを牛耳っていることは間違いないので、常に根拠や背景をチェックし、自分の頭で常にそれが正しいか検討するしかないだろう。

堤未果氏は2つの価値観を提示する。

- ① 前回紹介した「今だけカネだけ自分だけ」とおり、あらゆるものを数字やデータにし、利益と効率を優先し、結果が出なければ無駄として切り捨てる考え方：民主主義を根底から破壊する手法。
- ② 人間の暮らしや文化や伝統、顔が見えるものづくりや、数字では測れない価値を持つ教育、困ったときに助け合う共同体が象徴する「お互いさま」の価値観。

これから僕たちは①②のいずれをとるべきか？ ②に決まっているだろう。

②は、アイスランドでのテロ解決に、素手(非暴力)で立ち向かうことと似た構造だ。現実にアメリカ、IMFのやり方に正面から立ち向かい、その壁を完全に撃破できたアイスランドの実績も②の価値観に基づく。

ゴルフ界でも、太平洋クラブの会員たちは、常識論者たちの「絶対逆転は不可能」という意見を乗り越え、マルハンの支援を得て、ワールドマン・サックスの野望を打ち砕いたのだ。

ゴルフ界も、これまでの常識は全部一度ひっくり返してでも、再スタートを切るべきではないか。ただ、堤未果氏の「お互いさま」の価値観だけでは説得力が不足しそうだ。

次回は近未来に向けて、この価値観を補強するような、組織に関する新しい考え方を紹介したい。

## 世の中変われば、組織も変えないと…

最近、近未来の組織に関する記事が目につく。従来の企業・組織に対する違和感がどんどん強くなってきているという。

危機時の企業に関わる僕たちの感覚からすると、日本の組織は、戦後の高度成長の延長で毎年同じことを慣例的にくり返してばかりいて、役員報酬の高さに割に、危機管理が全くできていない。

彼らは、中間管理職がマネジメントを行うことで、成長してきた。しかし、バブル崩壊後、日本は世界の動きに取り残され、あるのは組織の閉塞感ばかりだ。

日本の企業と団体は、早急に世界の流れのいいところを勉強して、組織改革を実現すべきだろう。

ゴルフ場企業ばかりでなく、JGAほか日本ゴルフサミット会議加盟の16ゴルフ団体も同様だ。

## アイスランドの奇跡(その2)



西村國彦 (にしむら くにひこ)

お酒は飲めないしカラオケも駄目の営業下手の弁護士。そんな男が40歳を迎える年、ゴルフを始めたことから人生も性格も激変。ゴルフ大好き仲間を求めたオデッセイになって、世界を放浪。ゴルフフェスティバルも書く傍ら、法的に弱いゴルフ場会員たちの権利を守るため、「新理論」を構築。ハゲタカ外資にも正面から闘いを挑み、撃破。最近ジャズの世界も覗いている。日本ゴルフジャーナリスト協会理事。